

知識情報・図書館学類で何を学ぶか

はじめに、図1をご覧ください。この図は知識情報・図書館学類のカリキュラムの体系を示したもので、専門科目のところに3つの主専攻が書いてあります。専門教育の内容はこの3主専攻に集約されています。左端の知識科学主専攻にある知識形成論、知識構造化法という科目は、社会学や思考法といった人間の知識と思考に関する科目です。その隣の知識情報システム主専攻にある情報検索システムやデータ構造とアルゴリズムという科目は、知識と情報に関する技術系の科目です。さらに三番目の情報経営・図書館主専攻にある図書館論や知的財産権論といった科目は、一転して図書館や社会制度に関係する科目です（表1と表2の科目表には、哲学、社会学から、数学、工学まで実に幅広い科目が盛り沢山です）。

なぜこのような科目が並んでいるのでしょうか？一体、知識情報・図書館学類は何を学ぶところなのかという疑問が浮かぶことと思います。その答えは、次の3つのキーワードの中にあります：

ユニークな対象世界・新領域・学際性と総合性

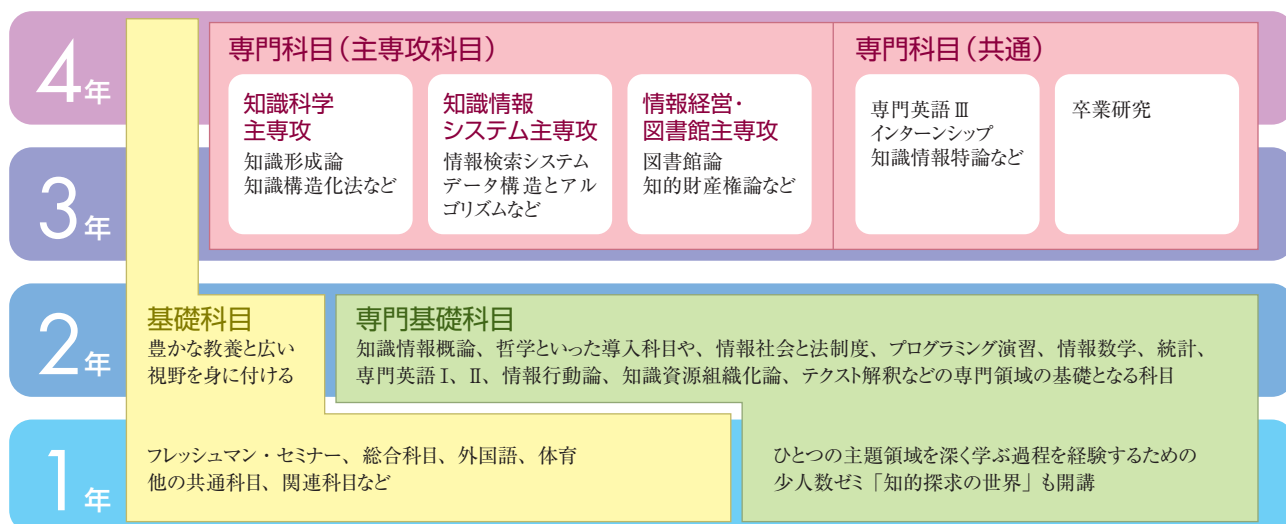
ここでは、この3つのキーワードを説明しながら、知識情報・図書館学類の教育の方向と特徴を説明し、そして、最後に**実践性**という特徴について述べます。

1. ユニークな対象世界

人間が他の動物と大きく異なる点は、社会が知識の記録を保持し、それが社会の発展を支えてきたということです。かつて記録は人々の記憶と伝承に依存してきましたが、やがて本が中心となり、今日ではデジタル技術とネットワークによる記録と伝達が重要な役割を果たすようになっています。記録とそのストック（図書館、今日ではデータベースやWebなど）は、ある社会が共有の知識を保持し、伝え、それを基盤として新しい知識を生み出し、そうして社会が発展していくための重要な役割を果たしています。

このような世界が知識情報・図書館学類が扱う領域の対象世界であり、それは既成の諸分野とは異なるユニークな世界です。ところで、例えば生物学は様々な生物の世界を対象世界としていますが、その対象世界の本質は生命現象であるといえます。では、知識情報・図書館学類の本質的な対象は何でしょうか。それは、ひと言で言うと、**記録による知識共有**であるということが出来ます。

図1 知識情報・図書館学類のカリキュラム体系



2. 記録による知識共有

人々が知識の記録を保持し、知識を共有し、新しい知識を形成していくという“現象”は人間社会の一般的、普遍的営みです。ここでは、この普遍的なあり方を知識共有といいます。多様な人間社会が様々なタイプの（本やデジタルな）記録によって知識を共有し、発展する様子は、それを突き放して対象化してみると、多様な生物が進化をとげていく様子や、多様な企業の活動を通じて経済が発展する様子と同様に、興味深い研究対象とすることができるのです。

知識共有現象を対象とした領域は最近になって大きな脚光を浴びるようになってきました。知識を共有するための情報技術が発展し、社会の原動力としての知識が重要になり、知識共有を解明することの重要性が高まってきたからです。エネルギー資源と同じように、知識のストックが社会の有用な資源（知識情報資源）と考えられています。

3. 知識情報・図書館学類の教育の領域

本による知識共有のための社会的な仕組みとしての図書館を中心的な対象世界とした学問領域は図書館情報学と呼ばれています。いまや、ネットワークとデジタルな記録の重要性が拡大し、多様なメディアと情報システムも重要な知識共有の仕組みとして対象領域に入ってきました。

知識情報・図書館学類は、このような視点から、図書館情報学をより一般化、普遍化して、知識共有現象を基本的な対象として、これから大きく発展すべき問題領域を扱おうとしています。この領域は知識情報学ともいうべきものです。

知識情報学は既成の学問領域とは異なります。中学校や高等学校には、このような知識共有を中心的な対象とした教科はありません。しかし、例えば倫理では人が何かを知るとはどういうことかを学びますし、現代社会では社会を支える知識がどのよう

なものかを学びます。国語や数学では言語や記号操作を通じて、知識を表現し、操作し、解釈する方法を学びます。中学校や高等学校で、実はいろいろな科目を通じて知識共有を理解する基礎を学んでおり、また、その学びの過程自体がまさに知識共有過程そのものということもできます。

知識情報・図書館学類では、既成の学問領域を横断して、それとは異なる新しい領域を開こうとしています。とはいえ、この領域はまだ発展の入り口にいる段階です。また図書館の社会的重要性はむしろ増加しています。このような点から、普遍性への拡張を意図した知識情報という表現と、伝統的な対象としての図書館の両方を含んだ名称を学類の名前としています。

4. 領域の特徴—人間・社会・技術

知識共有現象は多様な側面を持っています。それを対象とする学問領域も当然ながら多様な側面を持つことになります。表1に3, 4年生で学ぶ専門科目の一覧表をあげました。この表をみながら、3主専攻の具体的な内容をみてみましょう。

知識を獲得し、保持し、表現するのは人間なので、人間の思考や感性、行動といった側面から知識共有を取り上げる必要があります。この側面は「知識科学主専攻」において扱います。そこでは、**知識の本質、知識と情報行動、知識獲得のあり方と方法、知識の抽出・表現・探索、思考法**に関する理論と応用を主たる問題として扱います。

また、知識共有は人々の社会的あり方の重要な一側面です。知識共有は図書館や知的財産などの社会的制度によって支えられていますので、社会的、文化的な視点から知識共有を取り上げることも重要です。この側面は「情報経営・図書館主専攻」において扱います。そこでは、**知識共有に関する社会的制度、メディアと図書館の文化、知識情報資源の構築とサービスのマネージメント**に関する理論と応用を主たる問題として扱います。

そして、いうまでもなく、記録は技術を通じて実現されます。知識の表現、解釈、人々のコミュニケーション、知識情報資源なども技術によって支えられています。情報技術やネットワーク技術、コミュニケーションや表現の技術は知識共有の重要な要素です。この側面は、「知識情報システム主専攻」において扱います。そこでは、ネットワークにおける知識と情報の共有、データベース、情報検索、デジタル・ライブラリなどの知識情報技術に関する理論と応用を主たる問題として扱います。

これらの諸側面は、個々バラバラのものではありません。知識共有は社会における人々の“間”にあり、技術によって実現している現象であり、人間と社会と技術の3つの側面が密接に結合した総合的な現象なのです。

5. 学際性と総合性

伝統的な学問は、たとえば、人間の精神を扱う人文学、社会現象を問題とする社会科学、自然現象の解明を目指す自然科学、技術の理論と応用を扱う工学といった区分がなされてきました。しかし、現代はその枠を超え、伝統的な学問領域が従来の枠を超えて新しい領域を形成する時代といえます。たとえば、脳科学と工学と哲学が共同で人間精神の解明を目指しています。このような領域はしばしば学際領域と呼ばれます。同様に、知識情報学も人間の精神と社会、技術の学際的な領域として成り立っています。

ところで、学問の中には目的指向的な領域もあります。たとえば、医学は人々の健康を守ることを、農学は人類の食料の確保を、環境科学は地球環境の維持と改善を大きな目的としている側面があり、そのために自然科学、工学、社会科学、人文学といった伝統的な学問領域を総合して問題解決に向かっています。「知識情報学」も同様に、社会の「知識情報資源の形成」を目的とした総合科学でもあります。

6. 教育の特徴—文理融合

このように考えると、知識情報・図書館学類の教育は、人間、社会、技術（既存の学問領域でいうと、人文学、社会科学、工学）を幅広くカバーする必要があります。また、知識共有を理解し説明するという理学（自然科学）的アプローチと、知識共有を支える社会的仕組みの設計や技術の開発といった社会的、工学的アプローチを含むことになります。そこで、知識情報・図書館学類の教育の最も大きな特徴は文理融合といえます。

表1 知識情報・図書館学類の専門科目

科目群とその目的等	科 目
知識科学 主専攻科目 知識の本質、知識と情報行動、知識獲得のあり方と方法、知識の抽出・表現・探索、思考法に関する理論と応用を学ぶ	知識科学実習、サイエンスコミュニケーション、医療情報論、特許情報論、知識論、知識形成論、レファレンスサイエンス、学術メディア論、システム思考とモデリング、コミュニティ情報論、図書館建築論、知識構造化法、計量情報学、データマイニング、ソフトコンピューティング
知識情報システム 主専攻科目 ネットワークにおける知識と情報の共有、データベース、情報検索、デジタル・ライブラリなどの知識情報技術に関する理論と応用を学ぶ	知識情報システム実習、デジタルライブラリ、デジタルドキュメント、情報サービスシステム、情報検索システム、Webプログラミング、マルチメディアシステム、データ表現と処理、データベース技術、情報デザインとインタフェース、ヒューマンインターフェイス、知識資源の記述、知識資源の分析、知識資源の用語管理、グリッドコンピューティング、ソフトウェア構成、データ構造とアルゴリズム、テキスト処理、マークアップ言語
情報経営・図書館 主専攻科目 知識共有に関する社会的制度、メディアと図書館の文化、知識情報資源の構築とサービスのマネージメントに関する理論と応用を学ぶ	情報経営・図書館実習、情報法、知的財産権論、図書館情報法制度論、メディア社会文化論、出版文化・書誌論、図書館文化史論、中国図書館学、日本図書館学、古文書論、図書館論、学術情報基盤論、経営情報システム論、情報サービス経営論、情報経済論、パブリックガバナンス論、情報サービス構成論、コレクションとアクセス、教育文化政策、メディア教育と発達、学校教育と情報利用
社会での実習を通じたキャリア形成	インターンシップ
専門領域を学ぶための英語能力	専門英語Ⅲ、Ⅳ
研究・開発の先端的トピックス	知識情報特論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
専門教育の集大成	卒業研究

文理の両方に秀でた人間ということは望ましいことではありますが、それは非常に困難な目標です。しかし、文理融合の意味は必ずしもそれだけではありません。文理融合には、文理にこだわることなく多様な思考と価値の存在を認め、尊重すること、文理のいずれかを中心としつつ、他方のアプローチの存在と意義を理解すること、そして、文理の境界領域の新しい課題に挑戦することなど、様々なあり方が考えられます。知識情報・図書館学類で学んだ学生が自身の考え方に合わせつつ、このような見方を獲得してくれることを望んでいます。

表2をご覧ください。そこには専門を学ぶ上での基礎として学ぶべき科目が、それを学ぶ目的とともに示されています。多くの科目は、この領域における文理の両方の視点を理解するための基本的な科目として準備されており、比重の置き方はある程度任せていますが、学生には両方を学ぶことを要請しています。

たとえば、表2には図書館関連の科目が少ないように映るかもしれません。また、情報システムに関心がある学生にとっては、文系の科目を学ぶことは遠回りに思えるかもしれません。しかし、図書館あるいは情報システムに直接関係することだけを学んだのでは、現実社会で長期に渡って活躍することはできません。幅広い視野と原理的な理解に裏打ちされた力を養うこと、専門領域の内容に即して、人間、社会・文化、技術の結合と相互の役割と影響を理解することが、将来の実践的な活動の幅と質を支えると考えています。

7. 実践性

目的指向の総合科学には、その目的に関連する実際的な社会的活動が存在します。医学には医療活動が、農学には農林業や食品関連の産業等があります。知識情報・図書館学類の教育を活かすべき場所は、伝統的には図書館でした。現在もその重要性は増しつつありますが、同時に新しい活

動領域、たとえば、デジタル資料やデータベースの作成と運用、ネットワークや情報システムの開発と運用、知識と情報に関する社会的制度の運用、出版・流通などの知識と情報を共有するための社会的活動領域があります。

表1、表2には、学生が将来の職業イメージを形成できるように、キャリア形成関連の科目が入っています。このほかにも、1年次のフレッシュマン・セミナーでもキャリアを意識したプログラムを準備していますし、キャリア・コンサルタントによる個人指導も行っています。本学類で学ぶことを通じて、学生それぞれの将来を形成する基盤ができることを目指しています。

表2 知識情報・図書館学類の専門基礎科目

科目群とその目的等	科 目
概論、情報学群 共通科目	知識情報概論、哲学、情報システム概説、 知的財産概論、情報社会と法制度
すべての学生に身につけてほしい情報スキル	情報基礎、情報基礎実習、情報リテラシ実習、プログラミング演習Ⅰ、Ⅱ
数理的思考	情報数学、基礎数学A、基礎数学B
方法的思考としての統計とその応用	統計、量的調査法、多変量解析
知識や情報を扱う基礎技術の実践的演習	知識情報演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ
大学での学習に必要な英語能力	専門英語Ⅰ、Ⅱ
知識と人間の関わり の基礎	情報探索論、質的調査法、情報行動論、 知識発見基礎論、テキスト解釈
知識と情報を扱う 技術の基礎	知識資源組織化論、データベース概説、 コンピュータシステムとネットワーク、自然 言語解析基礎
知識に関する 社会制度の基礎	メディア社会学、生涯学習と図書館、公 共経済学、経営・組織論
キャリア形成 (職業観の養成と将来 の職業設計)	学問と社会：知識情報・図書館学類の 最前線、社会体験実習
深い教養のための 少人数ゼミ	知的探求の世界Ⅰ、Ⅱ

(赤字は必修科目)